



発行
NPO法人いわむら一斎塾
事務局 江戸城下町の館
〒509-7403
岐阜県恵那市岩村町317
TEL 0573-43-5087

『言志四録』は虚心坦懐に

岐阜女子大学教授

近藤 正則

芸能有る者は、多く勝心有り。又驕心有り。其の芸能有りて、而も謙にして且つ遜なる者は、芸の最も秀でたる者なり。勝の反は謙と為り、驕の反は遜と為る。芸能も亦心学に外ならず。

釈意

言志著録二〇〇条

芸能ある人は多くが勝気であり、またおごる心をもつ人がある。芸能を修得しつゝ、しかも謙虚にして、なおかつ謙る心も備えもつ人は、芸道においても最も秀でた人である。勝の反対は謙である。驕の反対は遜である。その視点からすれば芸能もまさに心を修養するための学問に外ならず、則ち心学なりと。

勝気が芸能を修得するための根性を生むものであるが、同時に謙の心(ゆずる心)と遜の心(へりくだる心)を修養する気構えが大切。多くの芸能の分野をみるに、言に心のあり様を説きながら、技を競うことのみにかたむき、精神の修養を疎かにする。「心」なくして人を感動させる力は生まれぬ。芸能はまさに心学である。

インターネットで「佐藤一斎」を検索すると、三万七千件もヒットする。各人各様の一斎への思い入れを綴るサイトが目立って多いが、中には、お世辞にも上手とは言えない自前の「朗読」を吹き込んだCDの売り込みサイトすらある。一斎語録が人口に膾炙するのは、決して悪いことではない。だが、研究者のはしくれとしては、「ちよつと待った。何か違うのでは」という思いも免れない。それは、多くの「一斎の語り部」たちが、原文に向き合うことなく、身勝手な思い入れで、一斎を偶像化していることによるのであろう。

『言志四録』に込められた一斎の文字遣いの工夫や息遣いを、虚心坦懐に読み取るには、原文を丹念になぞる他に手立てはない。今日はやりの現代語への翻訳や意識では、訳者の私意が介在していて、厳密には、一斎の『言志四録』を

読んだことにはならない。それは訳者自身の『言志四録』だからである。

『言志四録』の原稿本は、東京都立中央図書館の河田文庫に現存する。句読点のみの所謂「白文」である。これに訓点(返り点と送り仮名)を施して一般向けに刊行したのが、和泉屋吉兵衛、須原屋茂兵衛といった江戸の書肆。一斎生前の刊行であるから、一斎自身がこの訓点を見ていることになる。ことに須原屋は当時を代表する大手書肆で、グループの一員、天保十年の一斎著改刻『五経音訓』の版元神田石町須原屋源助などは、もとは侍の一斎門人であり、図書購入や著書刊行など何かにつけて近い関係にあった。『言志録』はかなり編集されて上梓されたもののようにだが、後の三録は年月順になつていく様子で、その時々が一斎が探究した書物や講義テーマなどが、三録各条の内容に反映している。いわば、自身の読書と思索のエキスを、「易簡直截」(『大学一家私言』の語)に綴つたのが、『言志四録』である。

和刻本に施された訓点を一斎点と言う。高校で教える漢文訓読法と較べて、於・于・而などの置き字や焉・矣・也・乎といった文末の助字もみな訓読するという特徴

があるが、昌平坂学問所の読み方が、明治になって文部省が示した漢文訓読法の基準になつたのだから、慣れば決して難しいものではない。なにしろ、訓読は、中国の古文を日本語に直訳する方法である。要は一斎の思索に思いを馳せ、意味を考えながら読めばよい。一斎の文章は含蓄に富み、現代人には難解な語彙も多い。しかし、辞書や参考書など簡便な道具の使用は最小限にして、じっくり四つに組んで思い巡らす方が、質実な理解が深化する。類似の表現を繰り返して吟味することで、一斎の真意が見えてくることもある。

『言志四録』を虚心坦懐に読むために、できれば、江戸時代の和刻本の複製本を作製して、一斎塾で頒布したいものだ。それを毎月の講読会のテキストにすれば、世俗的はやりすたりに拘泥されない、他に類を見ない岩村ならではの「一斎探究」になるのは請合ひである。



細井平洲と林述齋

細井平洲研究家

小野重仔

林述齋が林氏に養子に入った直後の寛政五年四月ころ、嚶鳴館の細井平洲を訪れたことがある。

請じ入れられて、述齋が席に着くか着かぬかに、玄関に訪う声があり、薩摩の赤崎源助だという。彼は名を楨翰、字を彦礼、号を海門、通称を源助（二年後には昌平校教官を勤める人物である）。

今日は大事な客があるから別の日に、と言われて源助はいう、「やがて国に帰りますから、明日というわけには参りません。」

小さな家だから丸聞こえ。「源助なら聞いておる。苦しゅうない。お通しあれ。」と述齋。さればと、席に出た源助は、一通りの挨拶ののち、平洲にいう、「お蔭で藩主侍読の命を受けておりますが、なお、君前の説教の仕方について御教示いただければ、この上なき御恩に存じます。」

脇から述齋もよい心がけた、わたしも久しぶりに、先生の御講義、聴聞したいと応援する。

「君前にては、まず第一に地下の卑しい言葉を使つてはなりません。貴人は卑しい言葉を聞くと、むざんとしたること（ぶしつけ）に思

し召して感銘なされぬものです。」
そういつて平洲は『論語』を出し、どこか開きなさい、と言つて開かせ、一章を朗々と講じ終えた。感に堪えた面持ちで述齋が聞く、「今の御講義は古訓にて候や。」
「さん候（さようでございます）」
太宰春台の『論語古訓』によりましたが、本文は孔子の言詞にて候「孔子のお言葉でございます。」と、平洲も澄まして、したり顔の述齋に答える。
感動を感動のままに表現せず、秀才ぶつて、古注だ新注だ、徂徠派だ何々派だ、と学をひからかす性向を暗に批判したのである。
平洲の親友に似た話がある。
何かと揮毫をせがまれた秋山玉山「熊本」は「己レガ嫌ヒ八魯国ノ浪人仲尼殿（孔子のこと）とよく書いたという（『甲子夜話』）。

また、滝鶴台「長州」は、日本とシナとどちらが政治しやすいかと聞かれて、シナが難しい、その理由として、シナは不学の人が政治をすることを自らのこととして恥じるが、日本は不学の為政者を恥じないから、と答えたという（『近世叢語』）。

共に権威主義を嘲笑風刺していて、真の教養とは何か、と教えてくれる。



細井平洲先生

細井平洲の教え

- 「学思行相まって良となす」
学んだことを、よく考え、そして実行して、はじめて学んだという。
- 「先施の心」
先施とは、自分からさきにおこなう、ということですが。

平成二十年 戊子の年に思う

徳増省允

平成十九年は「丁亥」（ひのとの）の年でした。

「丁」（てい）の上の「一」は、平成十八年の「丙」（へい）の上の「一」が続いている一方で、下方の「丁」は上方に対するもの、旧と新、善と悪といった対極的動きを示し、相方が対する勢力の衝突する相を表しています。

平成十八年から、特に十九年は世事千変あらゆる分野にあつて多発した不祥事は記憶できぬほどであり、政治経済もゆれ動き、世の人々は何を信じてよいのか混乱の極にいたっています。

日常生活の中にも安定と安心を失った人々の心、依り所なき生活の中で新年を迎えました。

年末恒例の、京・清水寺での平成十九年を象徴する一文字は、「偽」（ぎ／いつわり）でした。

誠に哀しきかぎりではないでしょう。経済大国日本は、ものの豊かさの中で大切なことを忘却し、全ては金（かね）金でしかない世の中にあります。

「偽」は「人が為す」という文字、全ては人びとの為せる結果であります。人間以外の責任による

ものでないことを深く懺悔し反省すべきです。

丁亥(ひのとる)の年をうけて今年は、どういう年であるのか、東洋五千年の歴史の中で多くの先人達が後人の為のこした偉大な学問と思想の力をかり、平成二十年、戊子(ぼし/つちのえね)の年について考えてみましょう。

陰陽五行説と干支(えと) 十二支による六十年周期の思想では、干(かん)は「幹」(みぎ)を表わし、支(し)は「枝」(えだ)を表わすと説きます。

安岡正篤、邦光史郎両氏の著書を参考として「干」と「支」のもつ意義を学び、本年の指針としたいのです。

まず、戊(ぼ/つちのえ)は十干の中の五番目にあたり、茂(しげる)、樹木が繁茂することを表わし、茂ることにより風通しや日当りが悪くなり、根本が弱り、樹木の勢いが落ち、梢が枯れ伸びることができません。

又、花や果実を養い成長させるのにも、多くの花を咲かすため、多くの実を得るためと、整理を行わずにおけば、花や実(果実)を結果として駄目にします。そこには、剪定とか摘果(てきか/果実を間引く)が必要であり、そのため果実とかが果決が求められます。

事業経営や家庭生活でも同じように良い結果を得るためには選択と削除のための決断力が肝要です。

「子」(ね)は、数がふえる、植物の芽が芽生えるきざしを表わし、「滋」(じ)と同義です。

ふえる、はびこるの意味から、新たな生命、新芽が伸びるなど、新しき生命力の創造と解することができます。

以上のことから、戊子(つちのえね)は二つの意味があるといわれています。

「ふえる」と「しげる」、万物や万事が繁栄し発展してゆくべき年でありながら、他方では「過ぎる」と矛盾や困難が発生すると。繁栄と発展の過程には、「落し穴」があるということになります。

前足に重心をかけず(勇み足にならず)、後足に重心を置き、チエックするために立ち止まる勇氣と留意が大切です。

「過ぎたるは及ばざるが如し」又、私欲私心にとらわれることなく、公欲公心によるグローバルな視点から思索し、行動することが大切です。私利私欲にとらわれている間は、正しき道、物事の道理は見えてきません。

今、一人ひとりの大人に自らの在り方、考え方を素直な心で考える覚悟と大人の見識が求められて

いるのです。

今年から四・五年は、今世紀前半を方向づける重大な時期であり、我国の将来を考える時、その選択が重要であると思うのです。

IT技術の発展により、情報はグローバルに把握でき、多くの書籍の発刊によって知識を得ることも容易です。しかし情報過多の中選択することなく、自らに都合の良いものだけを受容し蓄積しよしとする傾向にあるを憂うべき。知識の為に知識を求め、活かすことを忘れたあり様は、一層憂うべきこと。知識だけが一人歩きしているのでは、何も意味をなしえませんが。単に「物識り」に成ったにすぎないのです。

電通消費者研究センターの野村尚矢氏は、「世相を不す漢字に『偽』が選ばれた通り、あらゆる物への信頼が泡のようにはじけた。この信頼バブルを回復するには、企業の姿勢として問われるはず。『偽』を『義』に変えていくことが求められそうだ」と。

知識は単なる知識や情報の蓄積に終わることなく、体験に活かし、実践を通して経験し、見識(識見)を高めて育てることです。

その高い見識は精神の修養に勤めることによって、胆識を養い、重厚な己れをつくり上げます。

又、重厚な己れをつくることなく、自ずと胆識を養うことになります。

全てはゼロに立ち返り、原点に立ち、道理にそって思索、行動することが基本です。この年、一人びとりが誠に学び、自らに問う姿勢が必要なのです。それがまさに「生きる」意義でもあると思うのです。道徳ルネサンスです。

勇氣をもつて決断する「選択力」が求められ、それが大切さを増す時代になってきます。

選択力を高める為には「見識と胆識」を備えもつことが肝要となつてきます。

重ねて言うならば、人品骨柄を備え重厚な「教養人」として生きるためには、知識、見識、胆識の三識を備え高め、物事に対して確かな決断をくだせる力が、覚悟が大切なのです。

一人びとりが「生きる」とは、自らの使命を感得することに他なりません。自らをみつめる意識を高めるために、内面を見つめ直すことに価値を見出し、世相に蔓延する「偽」を振り捨て、「信」を掲ぶことに勤めるべきです。

今を生きる人としての使命、天命がそこにあるのです。

東海、江戸期の 三先人に学ぶ 三頭彰会連絡協議会発足

一昨年五月、豊田市の鈴木正三、東海市の細井平洲、恵那市の佐藤一斎にかゝる三市々長が出席し、「人づくり心そだては町づくり」をテーマにしたフォーラム、作家の童門冬二氏の基調講演とコーディネートによる各市長とのトークが岩村公民館大ホールに六〇〇人余がつどい大成功で終わりました。この時を好機として、三市の頭彰会が連絡を密にして情報交換の場づくり、人的交流のため、協議する場を発足させることとなり、その準備を進めてきました。少々時間がかゝりましたが本年秋までには正式発足する見通しとなっております。

- ・平成二十年五月二十九日(木) 平洲祭―関係講演会
- ・平成二十年六月中 鈴木正三学会
- ・平成二十年十月二十五日(土) 言志祭―佐藤一斎

百三十一回

岡田 登美子

一月の勉強会は、新年会を兼ねてサラダコスモで行いました。場所を変えるのと又違う趣が有り良いものだと思います。

サラダコスモの社長様を始め皆様方が、一斎先生の言志録に思い入れが深く、「おじいちゃんとはく」の原画を額に入れて、飾られてあるのを見て、心が温かくなりました。

勉強会は言志後録の「史を読み感あり」でした。

出席者は十七名で、サラダコスモの方も出席して下さいました。

出席の方が、どんな思いを持たれたかと、お聞きすれば良かったと思っている所です。

山村邦夫さんの指導に依り始めて今回で百三十一回となります。

今振り返ってみて出席して来て良かったと、思っている所です。

私の身にどれだけ入ったかは、疑問ですが折にふれてふと言志録の言葉を思い出したり、感じたりすると、やはり言葉は生きていると思ったりします。

皆さんと学んだり、お話を聞いたりしながら、今後も言志録の勉強を続けてゆきたいと、しみじみ思っております。

トピックス

◎平成二十年度 主要行事

一、孔子祭(岩村町文化財保護協会主催)

四月十二日(土)

午前十時〜釈奠の儀

於 知新門前

午後一時〜記念講演会

於 岩村公民館

二、佐藤一斎頭彰会定期総会

四月十二日孔子祭記念講演会終了後

三、NPO法人いわむら一斎塾定期総会

四月十二日頭彰会総会終了後

四、全国藩校サミット

六月二十一日(土) 於熊本市

二十二日(日) 〃

五、嚶鳴フォーラム

九月二十七日(土) 於高島市

二十八日(日) 〃

今年の一斎塾研修旅行は、嚶鳴フォーラムに参加します。

六、言志祭〜佐藤一斎まつり〜

十月二十五日(土) 於 佐藤一斎銅像前他

◎一斎塾の活動や定例の言志四録 講読会などの案内については、ホームページをご覧ください。
<http://issaiyuku.ftw.jp>

一斎塾が紹介する書籍

名言録集

五百円

・おじいちゃんとはく 千五十円

・言志四録抄日捲り 七百元

・大人の寺子屋 六百元

・重職心得箇条 八百円

・生き方ルネッサンス

・佐藤一斎の思想 二千六十円

・佐藤一斎 三百円

・下田歌子著

・女子の修養(現代語訳) 七百元



あとがき

年も変わり春一番が吹いたとか、花の便りも目にする様になりました。四月、玉稿をお寄せ下さいました各先生方を始め一斎塾の皆様方の御協力により塾報第四号をお届けする事が出来て本当に嬉しく有難く思います。又、各先生方にお忙しい中特別講座で講演して戴き何か一つでも得る事が出来たならとありがたく拝聴させて頂きました。又今後共よろしくお願ひ申し上げます。

いわむら一斎塾を長く続けて行く様に私達も頑張ります。御協力よろしくお願ひ申し上げます。